

ヒロイン役は、お受け致しかねます。

## プロローグ

十一月、東京。

秋も深まったある晩のこと。大人の夜遊びスポットとして知られる都心の一角で、路肩に停車したタクシーからふたりの客が降りた。街灯の下、先に姿を見せたのは黒いジャケットを着た長身の男。あとから降りたのは、モードな感じのボブヘアで、スレンダーな体躯にアイボリーのコートを羽織った、知的な雰囲気的女性だ。

「さあ、行こうか」

歩道に降り立った男は、どこか楽しげに言う。黒いジャケットの下には黒のシャツに黒のパンツ、そして黒縁のメガネという、夜の闇に溶け込みそうなコーディネート。

けれど足が長くてプロポーションは抜群、うっすらほほ笑んだだけで色気が漂い、あたりがぱあつと華やぐようだった。

——さすが人気俳優ね。

彼女は連れの男を見つめて、心の中でそうつぶやいた。

男の名は福山一樹、三十歳。モデル出身の超がつくほどイケメンな人気俳優だ。そしてボブヘア

の女性の名は長谷部ゆり、二十八歳。一カ月ほど前までホテルウーマンだったが、訳あって今は一樹の彼女に扮している。

「ほんとに、このあたりでいいのでしょうか？」

ゆりは周辺を見回した。こぎれいなビルや飲食店が立ち並ぶ界隈は、美男美女のカップルの姿にまじって、ファッショナブルな業界人ふうの人の姿もちらほら見受けられる。

「ああ。一步路地に入ると芸能人行きつけの会員制の店が多いんだ」

なるほど——。つまり芸能人のプライベートを狙うカメラマンも潜んでいるということだ。スキャンダル写真を撮りたい彼女たちにとって、おあつらえ向きの場所と言える。

「ほら」

と言つて、一樹が左手を差し出してくる。手をつなげと言いたいらしい。

「それとも、こっちがいいか？ ゆり」

ためらっていると今度は、腕を組めるように肘を曲げてくれた。ゆりはごくりとつばを呑み込んでから、大胆に彼の腕に自分の腕を絡めた。

——いまささら怖気づいてどうする。仕事だと割り切つて、彼の恋人役……「プロ彼女」を引き受けたのだから。

「こちらで……、参りましょう」

そう言つて、腕を組んだままふたりで歩き出す。一步踏み出すたびにピンヒールの踵がコツコツと鳴る。

この印象的なスタイリングの髪はウィッグだ。洗練された高価な靴と服はすべて借り物。黒いサングラスをかけ、普段はしないようなぼつちりメイクもしている。だからたとえ誰かに見られたとしても、それこそ週刊誌のカメラマンに激写されたとしても、人気俳優・福山一樹の連れが自分だとばれる可能性は低い。

それでも緊張した。そんなゆりの気持ちが伝わったのか、突然一樹は立ち止まって笑い出す。

「何度も言うが、もっとリラックスしろよ」

言うなり彼は腕をほどいてゆりの腰に回し、ぐつと引き寄せた。

ちよつと——！

声にならない叫びを上げそうになると、一樹が顔を寄せてささやく。

「だって俺たちは恋人同士なんだ。ベタベタするのは当たり前だろう」

「正しくは恋人同士という「設定」です……」

「設定なんて、くそくらえだ。俺は、やるときは徹底的にやる」

一樹は身を強張らせるゆりを自分の前に立たせて向き合い、両腕をゆりの腰に回して逃げられないように身体を密着させてきた。

「両手を俺の胸に当てて、俺を見ろ、ゆり。こら、顔をそらすな」

……彼は演出家にもなったつもりだろうか。次々と彼の口からアイデアが出てくることに感心する。演技に関して自分は素人なので、任務を完璧に遂行するためには、彼の指示に従うべきだと、ゆりは判断した。

どこかに潜むカメラマンに絶好のシャッターチャンスを与える。それが今の自分の仕事だ。そして今夜は路上キスの現場写真を撮らせる……、という目的があつてこの界限に来た。

じっとしていると一樹の顔がぐっと近づいて、頬に息がかかった。

「え……、もう、ですか？」

これは仕事。頭ではそう理解しているものの、思わず言葉がこぼれ出てしまった。仕事となれば、たいていのことには動じずにいられるのに。一樹が相手だと調子が狂う。

「そう。今すぐやるんだ。あそこの角にカメラマンがいる」

「え？」

「練習したとおりによれ。絶対に路上キスの現場として記事になるから」

ゆりは小さくうなずき、目を閉じて彼がキスしやすいように小首をかしげる。

覚悟ならできている。やるときは徹底的にやる。上等だ。

「いつも、こんなに素直ならいいのに。ああ、じっとして。あとは俺に任せろ」

冗談めいた声だが一樹は背中に戻した手に力を込めて、ゆりを力強く抱こうとした。

人前でキスなんて――

初めは、ただ手をつないで外をうろつくだけでいいという約束だった。でも日がたつにつれ、それだけでは不十分になってしまった。今はドラマや小説の世界で言うところのヒロインになり切つて、キスに溺れる女を演じなくてはならない。

一樹はこの状況を楽しんでいるように見える。うぬぼれかもしれないが、仕事抜きでゆりを欲し

ているような……。そんな熱病みたいなものを感じる。

――ダメ。余計なことは考えない。

完全に彼のペースにはまっている。わかつてはいるが、今はただ目を閉じて彼の腕に身を委ねるしかできなかった。

## 第一章 笑わない女、プロ彼女になる

話は少しさかのぼる。

九月。大分県別府市、ホテル「エトワール」。

「ホテル・エトワールへようこそ。それでは係の者がお部屋にご案内いたします。ごゆっくりお過ごしください」

ホテルのロビーから望めるビーチが黄昏色に変わる午後六時過ぎ。長谷部ゆりは東京から来た中年の夫婦連れに、チェックインが完了したことを告げていた。エトワールでは、チェックインを座つて行う。ホテルに着いたゲストはロビーのソファに案内され、ホテル特製のかぼすジュースを飲みながらゆったりと、書類にサインしたり、館内の説明を聞いたりできるのだ。

「このジュース、すごくおいしかった。お風呂のあとにまた飲みに来るわ」

ソファから立ち上がった妻のほうが、テーブルに置いた空のグラスを名残惜しそうに見る。このかぼすジュースは、ロビーにあるドリンクバーでは無料で飲むことができるのだ。それに売店でも販売しており、お土産に買って帰る客も多い。

「お気に召していただきありがとうございます。ドリンクバーは夜十一時までご利用いただけます」

「わかりました。どうもありがとうございます」

妻は笑顔で礼を述べ、夫と並んで、ベルボーイのあとについて歩き出した。ゆりはその場でお辞儀をしたまま、ふたりを見送る。

別府湾に面した、ラグジュアリーなりゾートホテル「エトワール」。ここは様々な旅行予約サイトで常にランキング上位に入る人気ホテルだ。ゆりはおととしの夏からこのエトワールで、フロント業務についている。

明るいアイスクレートのスーツに身を包み、華やかな赤のスカarfを襟元に巻く。長い髪はうしろでふんわりまとめ、イヤホンにピンマイクというインカムセットを装備する。

二十八歳独身。恋人はいないし結婚の予定もなし。日々、黙々と仕事に励むのみ。

今日は早番シフトで朝六時からの勤務だ。本来ならとっくに帰っている時刻なのだが、間もなく来館するVIPの出迎えのため残っている。

そのVIPというのは、甘いマスクで世の女性を魅了し続ける人気俳優の福山一樹だ。彼は昨日から別府の温泉街で撮影が始まった二時間ドラマに主演するため、今夜からエトワールに泊まる。そしてゆりは彼を担当するスタッフのひとりに任命されていた。

「VIP遅いですね」

フロントデスクに戻ると、今夜の遅番である新條慧が小声で言った。新條は入社二年目、いつもニコニコしているふんわり系の後輩だ。

「仕方ない。スケジュールが押して、予定していた飛行機に乗れなかったっていうんだから」  
ゆりは素っ気なく返事する。一時間ほど前に福山のマネージャーから、そんな連絡が入った。明日も早番なので福山には挨拶だけして帰るつもりだが、到着が遅れているのでまだ帰れそうにない。「さすが売れっ子ですなえ……。ところで、ゆりさんは相変わらずクールだけど、イケメンに興味ないんですか？ ほかの女子はあの福山一樹が来ると聞いて大盛り上がりだっているのに」

「……別に。イケメンでも、大物でもいつもどおりにお迎えするだけだから」  
さらりと言うと、新條が目を丸くする。クールかどうかはわからないが、少なくとも自分はミィハーではない。それにエトワールに来る前は東京の有名ホテルで働いていたので、国内外のVIPを何度も迎え入れた経験がある。だから有名人に免疫があるのだろう。

「あ、あはは……。そうですよ。さすがはゆりさんです」  
慌てたように笑った後輩は、でも……。とおしゃべりを続けた。

「うらやましいな。僕も早く上司に信頼されて、ゆりさんみたいにVIPの担当をしたいですよ」  
「じゃあ、とにかくコツコツ頑張るしかない。何事にも近道なんてないから、早く認められたいと思うなら、他人の倍、いや十倍くらい仕事すればいい」

「十倍って……。もう……。ゆりさん、相変わらず冗談きついです」  
後輩は呑気に笑い、ゆりの背中をべしべし叩いた。決して冗談のつもりではなかった。自分が成長し、お客様に信頼していただくには、小さなことを積み重ねていくしかない。少なくともゆり自身はそう信じて、これまで仕事と向き合ってきた。器用な性格ではないため、それこそ仕事以外は

すべてをなげうって働いてきたのである。

そんなことを考えていると、奥のドアが開いてダークスーツの小柄な女性が出た。彼女は宿泊部の女性マネージャー、木下静香。ゆりと新條の上司だ。

「なんだか楽しそうね。ところで新條君、少しの間、彼女を借りるわよ。もう一度、VIPのお部屋の確認をしておきたいの。大丈夫、すぐに戻るから」

「え、は、はい。どうぞ……」  
手招きされたので、ゆりは新條を残して静香とともに最上階へ向かう。エトワールは最上階がクラブフロアになっていて、福山はその中の一番広い客室であるロイヤルスイートを二週間ほど押さえている。

エレベーターを降りて廊下を進み、ロイヤルスイートの前までくると、ゆりはマスターキーでドアを開け、先に入って上司を中に招き入れた。

「金曜だつていうのに悪いわね。遅くまで残ってもらっちゃって」  
「いえ。わたし、仕事が好きなのでお気遣いなく」

奥のダイニングルームへと進みながら、静香は盛大なため息をもらした。

「はいはい。いつものゆりちゃんだわ。おせっかいなのはわかっているんだけど、たまには息抜きしたらいいのに。今夜だつて本当は、合コンの予定があったんでしょ？ 給仕係の子に聞いたわ。素敵なメンズとの出会いを潰してしまって、申し訳なく思っているのよ」

確かに今日、給仕係の先輩から合コンに誘われていた。これまでに何度も誘ってくれていたため、

断り続けるのも気が引けて了承したのである。

彼女は、なにかとゆりを気にかけてくれている姉御肌の先輩だ。『県庁やメガバンク、広告代理店勤務の優良株ばかりを集めたから期待しててね!』と明るく誘ってくれたのだけれど、あまり乗り気になれなかった。

恋人を作ったり、人と深く関わったりすることが、「あるとき」——両親を交通事故でいっぺんに亡くしたときから苦手になってしまったのだ。父が残した借金のせいで、たくさんの人に迷惑をかけたし、ゆり自身も散々苦労した。もう、そういう思いをしたくなかった。

自分の振る舞いのせいで、職場の一部の人たちから「仕事人間の鉄仮面」と陰で呼ばれていることも知っている。それでも、ニコニコと人の懐に飛び込んでいく気になれない。

だから、VIPの到着が遅れ、合コンに参加できないとわかったときはホッとしてしまった。

ゆりは返事をする代わりに広い室内を見渡した。シックな絨毯を敷き詰めた室内は快適な温度に保たれ、優雅なデザインの家具や調度品の上にはチリひとつ落ちていない。

ゆりが別府にきたのはおとしの夏だ。大学卒業と同時に日比谷の高級ホテルに就職したが、そのホテルとエトワールが提携したので、思い切つて異動を希望し採用された。

両親はゆりが高校生のときに亡くなっている。地元にとどまる必要もなかったのだ。今のところ契約社員だが、九州での生活にも慣れたので、次の契約更新時には正社員での契約を願い出ようと考えている。

静香とは異動直後からの付き合いで、同じ神奈川県出身ということもあり、なにかと面倒を見

てもらっている。上司として、とても尊敬している。けれど踏み込まれない領域もある。「気を遣わせてしまい申し訳ありません。ですが、わたしは合コンにも素敵なメンズにも興味はありませんので」

「知ってる。仕事大好きで、恋愛や人間関係には無頓着。なのにさっきの新條君しかり、いつのまにかみんなに懐かれちゃう。不思議な人よね、ゆりちゃんは」

——懐かれる……。そうだろうか。自分はいわゆる冗談が通じないタイプで、九州訛りもなく、いかにもよそ者ふうだ。それが珍しくてちよっかいを出されているだけだと自己分析している。

「なーんてね。おしゃべりしてる場合じゃないわね」  
静香は言葉を切ると、ふかふかの絨毯の上をきびきびと歩き回った。

「寝具やアメニティはすべてご希望の物をそろえた。掃除は万全。食べ物のお好みも厨房に伝えている。警備員も増員した……。ほかになにか、忘れてることないかしら」

「昨日から何度も確認しました。大丈夫です。あとはお迎えするだけで」

ゆりはダイニングテーブルのそばに立ち、上司を安心させるように言う。

「そうよね、落ち着かなきゃ。ほら、うちつて一般客を優先してきたから、有名人なんてめつたに來ないでしょ? 緊張しちゃうわよ」

彼女が言うには去年就任した新社長の意向で、いろいろと方針が変わりつつあるのだそうだ。

「福山様は早朝にここで朝食を召し上がって、そのあと撮影に向かわれる。お帰りはだいたい夜の八時から九時にかけて。帰ったらこの部屋かクラブフロアのラウンジでご夕食を召し上がる」

「はい。いただいたスケジュール表のとおりです」

VIPの受け入れは一般客とは異なる。たいていは、裏口や従業員が使用する通用口から出入りさせ、食事も客室で取ることが多い。ファンやマスコミを避けるため、滞在しているホテルを明かさなない。

「朝は私の出勤前にお出かけになるから、ゆりちゃんが通用口までご案内してね。夜は私がお迎えしてここまでお連れするから」

「わかりました」

「ゆりちゃんの携帯の番号も、あちらのマネージャーさんに伝えておいたから」

「はい」

静香はようやく安心したようにほっ……と、息をもらした。

「でもクールなゆりちゃんも、福山一樹は知ってたのね、少しほっとしたわ」

「それくらい知ってます。有名な方ですし」

ゆりの頭の中に男性化粧品のテレビCMが浮かぶ。シャツの前をはだけてセクシーな腹筋を披露している男性が福山一樹。長身に甘いマスクの正統派の美形で、元々はファッション雑誌のモデルだったと思う。俳優に転向後も写真集を出せばバカ売れし、CMにも引っ張りだことだ。

活躍の場は国内だけにとどまらず、つい最近、全編英語の海外映画に出演したことが話題となっ

た。今では男女を問わず幅広い年代層に支持されていると聞く。

「サインをねだるのはダメだけど、目の保養くらいはさせてもらいましょう。イケメンなんですから」

ふふ……と、静香は色つぼくほほ笑んだ。一応彼女は既婚者で、郊外の家で夫とふたり暮らしだ。

「わたしは興味ありませんので」

「また、そんなことを……」

静香はなにか言いかけてためらい、やがてしんみりと言った。

「あなたの抜かりない仕事ぶりには大いに助かっている。でもね。もっと遊びなさい。人生には彩りも必要なのよ」

見つめられて、どきりとする。静香は上司というより、歳の離れた姉のようだ。心の中まで見透かされそうで、ゆりは思わず視線をそらしてしまった。

「おっしゃりたいことはわかります。ただ苦手なだけです。ああいうタイプは」

子どもの頃、近所にカズキという名の幼なじみがいた。スポーツ万能で成績優秀、学校には彼のファンクラブがあったほどの美少年だが、ゆりは彼が苦手だった。

同じカズキという名前のせいかわ、福山一樹を見ているとその苦手な幼なじみを思い出すのだ。

「でも安心してください。興味がなくても、きちんとお世話いたします。仕事ですから」

そこでインカムから新條のSOSが聞こえてくる。確認は済んだので、ゆりは静香とともに急いで部屋をあとにした。



「そうだ。言い忘れていたけど、予約係の中園なかぞのさんには気をつけて」

階下へ降りるエレベーター内で上司はそう忠告してきた。中園綾子あやこはゆりと同様転職組で、半年前に東京のOLを辞めてエトワールにやってきた。去年就任した社長めいの姪で、わがままで勤務態度が悪いのに誰も注意できず、管理職を悩ませているらしい。

その綾子が福山の担当になりたいと駄々だだをこねたのは、誰もが知るところだ。

「いくら社長のお身内でも、敬語もろくに使えない人にVIPの担当はさせられないわ。そう伝えただけど納得してくれなくて……。怒りの矛先はなはがゆりちゃんに向くかも」

やっかいな相手のことを忘れていた。綾子とは、今までも何度か衝突している。無愛想で融通ゆうちゆうがきかないゆりのことを、綾子は煙たがっているのだ。恵まれた環境で育ち、お姫様氣質の彼女は、自分の思い通りに動かない人間を嫌っていた。

以前、彼女がほかの従業員たちに、ゆりの陰口を言っているところに出くわしたことがある。

『長谷部さんは仕事が好きなんです。しかもフロントのくせに愛想がなくて、いっつもツンツン。まあ美人なのは認めますけどお、お客様は怖がってドン引きなんですよ？』

『ド、ドン引きって……』

会話の輪の中にいた男性従業員から、かすかな苦笑がもれた。綾子はゆりの姿を認めると、バカにするような視線でちらりと見る。

『みんな言ってますよ、仕事人間の鉄仮面って。あの人がいると、場が白けるっていうかー』

『はあー？ 鉄仮面で。ちよつと。中園さん……』

綾子の暴走を止めに入ってくれたのは、ゆりを合コンに誘ってくれた給仕係の先輩だった。しかし、ゆりは声を荒らげた先輩を、そつと手で制した。綾子は普段からこうなので、相手にしないことにしている。それから戸惑い気味の男性陣に目を向ける。

『ご心配には及びません。本当のことなので、言いたいように言っていただいて構いません』

ざわついていた一同がしんと変わったので、ゆりは、姿勢を正して歩き去った。

綾子はムカつくが、彼女の言うことは半分くらい正解だ。プライベートよりも仕事優先、他人の機嫌をとるための愛想笑いはしない……。それらは事実。ホテルマンになってそろそろ六年だが、ずつとこのやり方で生きてきた。

ホテルの客にドン引きされているかどうかはわからないが、わかってくれる人もいるので、今さら生き方を変えるつもりはない。

「大丈夫です。わたし、タフなので。なにか言われても倍返ししますから」

頭を抱える上司にきつぱり言った。こんな性格だから、自分の振る舞いをよく思わない人がいるのは当然だ。非難されることには慣れている。そして、やられっぱなしでいるほど柔やわでもない。静香は安心したように、胸を撫なでおろした。

それから一時間ほどして福山の一行は到着したが、社長以下重役陣が総出の出迎えとなったため、ゆりは同行してきた男性マネージャーにしか挨拶あいさつできなかった。ホテル近くの社員寮に帰宅したのは夜中の十二時で、かろうじて五時間ほど眠っている。

金曜日の朝は六時から勤務についた。

よく晴れて気持ちのいい朝だ。七時頃ロビーでゲストに朝の挨拶あいさつをしていると、少し前に散歩に出かけた宿泊客が戻ってきた。昨日かぼすジュースがおいしいと言っていた夫婦だ。ゆりを見つけたるなり妻のほうが駆け寄ってくる。

「お帰りなさいませ。散歩はいかがでしたか？」

「海がとつてもきれいでした……。けど、外で変な人に声をかけられて……」

「変な人でございますか？」

「ええ。高そうなカメラを持った男の人がふたり……」

妻は玄関ドアの向こうを指さす。ゆりは夫婦に朝食を食べに行くようすすめると、もうひとりのフロントにあとを任せ外へ出た。車寄せのはずれのほうに宿泊客ではなさそうな男がふたり、立ち話をしている。男のひとりにはプロが持つような立派なカメラを首から提さげている。

「なにかお困りのことがございますか？」

そばまで行って声をかけると、男たちが驚いて振り返った。

「えーと、その……。私、週刊ゴシップの林と申します。こっちはカメラマンでして……」

ボディバッグを身に着けた男が名刺を取り出し、差し出してきた。週刊ゴシップ——。著名人のスキャンダルを扱う写真週刊誌だ。名刺の住所は都内にある出版社となっている。

やっぱり記者か。ずいぶん早くかぎ付けたこと……

「実は俳優の福山一樹を取材してるんですよ。こちらに泊まってますよね？」

林と名乗った男が探るような目で問いかけてきた。ゆりは、ひるまずに答える。

「申し訳ないのですが、そういった質問にはお答えしかねます」

たぶんさつきの夫婦にも、同様の質問をしたのだろう。返事を聞いて記者たちは苦笑した。

「まあ、そう言わずに……。情報源があなただつてことは内緒にするから、泊まってるかどうかだけ教えてくれませんか？ もちろんお礼はしますよ」

「いいえ。それには及びません」

ゆりはいつものように、ビジネスライクに伝えた。

「ほかのお客様のご迷惑になるので、ホテルの敷地内での取材はご遠慮ください。警告を無視して迷惑行為を繰り返されるようでしたら、しかるべき対応を取らせていただきますが」

「あー、はいはい。わかりましたよ……。どうもお騒がせしました」

男たちは意外にあっさりと退散した。ゆりは彼らを通り出るのを見届けてから、事の顛末てんまつをインカムで報告した。マスコミはそう簡単に諦あきらめない。たぶんホテル周辺に張り込むはずだ。

ロビーに戻ってみると、フロントの主任が心配そうな顔で待っていた。主任の隣には顎あごひげをたくわえた、業界人ふうの男がいる。福山のマネージャーの高津たかつだ。

主任は、ゆりを見つけるとすぐさま駆け寄ってくる。

「記者がうるついでるって本当か？ 長谷部」

「はい。でもちよつとおどかしたら引き上げました。一応、警備に連絡しておきます」

「そうか、さすがは長谷部だ。ああ、警備には俺が連絡するから、お前はお客様のお手伝いをして

さしあげなさい」

安堵あんどの表情を浮かべた主任は、小声で高津のほうを指す。

「わかりました。……おはようございます、高津様」

ゆりが挨拶あいさつをすると、高津は人当たりのよい笑みを浮かべた。

「おはようございます、長谷部さん。ゆうべはどうも。いやー、助かりましたよ。外の様子を見に降りて来たら、あなたがあいつらにガツンと言ってくれはったところで……」

「ごらんになっていたのですか？」

「はい。事情があつて現在、追われていますもので」

高津は苦笑した。ぼつと見は三十代の後半くらい。物腰は柔やわらかく、かすかに関西訛なまりがある。きちんとジャケットを着て、肩から荷物の詰まったトートバッグを提たげていた。

「記者たちは、たぶんまた戻ってくると思います。今のうちに出発されたほうがいいかもしれません」

そう提案すると、高津がこくんとうなずく。

「今から車を回しますので、お手数ですが一樹を通用口まで連れてきてもらえますか？」

「かしこまりました。すぐにお連れいたします」

主任にあとを任せ、ゆりは急いで福山のいる最上階へと向かった。

フロアはしんとしていた。ゆりはロイヤルスイートのドアの前に立ち、チャイムを鳴らす。やや

あつて足音が聞こえ、両開きドアの片側がいきなり開いた。ゆりは一礼し、ゆつくりと顔を上げる。

「フロントの長谷部と申します。高津様のご依頼で迎えにあがりました」

「ああ、聞いてますよ」

低いが朗々ろうろうとした声だ。

そこにいたのはシンプルな白いTシャツに、濃紺のクロップドパンツをはいた長身の男だった。

部屋に備え付けのスリッパを足につっかけ、Tシャツの襟えりにサンガラスをぶら下げている。髪は洗いがらしといった雰囲気ふんいきで、無造作にかき上げた前髪がはらりと額ひたいにかかっている。

ロールアップした袖口からのぞく両腕がしなやかなのに遅おそく、つい目を奪われる。

「靴が決まらないんで、少し待って……」

足元を指さした彼は、ゆりを見つめたまま途中で言葉ことばを切った。

服も髪もプロが仕上げる前の、素すの福山一樹がそこにいる。でもこちらをドキドキさせるオーラは健在だ。そんな彼があまりにも熱心に自分を見つめるので、ゆりもまた言葉が出なくなる。

そういえば、こんなふう**に**強い視線を、以前にも誰かに向けられたことがあるような気がする。

何事にも動じなくなった自分が、こんな気持ちになるのは久しぶりだった。なんとなく落ち着かなくて、逃げ出したい感覚くわんかに襲おそわれる。やがて、形のいい彼の唇が意外な言葉をつむいだ。

「ゆり……、ゆりか？」

最初に気づいたのは彼のほうだった。

「俺だよ、カズキ。お前んちの隣に住んでた、屋代やしよ一樹だよ。忘れたのか……？」

「やしろ……一樹？ え？ カ、カズくん……？」

声が上がった。屋代一樹は子どもの頃、隣家に住んでいた、あの苦手な幼なじみだ。最後に会ったのは彼が大学二年生で、ゆりが高校三年生のとき。記憶の中の一樹と目の前の男の顔がゆっくりと重なり、やがてぴたりと一致した。

——なんとということか。イケメン俳優福山一樹の正体が、幼なじみのカズくんだったとは！

「うそ……、でも福山って言うんじゃない……」

「福山は芸名だよ。本名が違うなんて、よくある話だろ……。まあいい、とりあえず入れ」

一樹はゆりの肩に手をかけ、なかば強引に室内に招き入れた。そんな仕事もまた、ゆりが知っている一樹だった。

「あの、カズ……、いえ福山様……」

背後でドアを閉められて、思わずそう口にする。この部屋は、入ってすぐ狭いホールになっていて、コンソールテーブルや大型のシューズラックがある。正面にはリビングルームに続くドアがあり、今は開け放たれたままだ。

「一樹でもカズくんでもいいよ。まさかこんなところでお前に会えるなんてな。うちのおふくろが知ったら泣いて喜ぶぞ」

「え、あの……！」

言うなり、一樹は強引にゆりにハグした。

「——っ！」

ゆりは声にならない叫びを上げる。記憶している限りでは、こんなふうに誰かにペースを乱されたことはなかった。仕事柄、過去にもお客様に声をかけられた経験はある。そんなときでも淡々とかわして、動揺することはなかった。しかも、強引に接触を持つとする行為はセクハラ……のはずなのだが、抗えない。身体に回された逞しい腕、体温の高い肌、ほのかな甘い香り。頭がぐらくらし、心臓がばくばく高鳴り始める。

懐かしい一樹。自分の顔が、ぼおつと熱くなるのを感じた。

しかし次の瞬間、がばりと身体が引きはがされる。

「十年ぶりだよな。ていうかお前、きれいになった……」

一樹はゆりの両肩に手を置いて、真上から見下ろした。まつ毛が長く、こちらの心を支配してしまいそうな印象的な瞳が、じっとゆりを見つめる。

「こんなふうに見つめられると、ドキドキするぞ」

「いえ、だから……」

見つめているのはあなたのほうで……。そう訴えたいが声にならない。ハグされて穴が開くほど見つめられて、ゆりの心は乱れに乱れた。

「お前のことはずっと気にしてたんだ。どうして連絡してこなかったんだよ」

「それは……」

「引っ越したとき音信不通だし、そのうち誰かが日比谷のホテルでお前を見たっていうから、探しに行ったんだ。けど会えなくて」

「は、はい……以前は日比谷に……。それで、おとこの夏からこのスタッフに」

うまく言葉が出ない。かろうじてそう答えたゆりは、自分を奮い立たせようと、両手をぎゅっと握りしめる。

「そうか。元気そうだし、少し安心した。にしても、すごい偶然だな」

一樹は相手を墮落させるような甘いほほ笑みを浮かべた。まるで過ぎ去った十年などなかったかのようになれなれしい。でもゆりはまだ、今をときめく人気俳優になった幼なじみにどう接したらいいかわからないでいた。

彼に見つめられると、ふたたび無力な少女時代に戻ってしまいそうで、不安にすらなる。あんなふうに弱い自分には戻りたくない。この十年で必死に築き上げてきた、何事にも動じない強い自分。それを簡単に崩されたくはなかった。

「仕事、何時に終わるんだ？ あとで飯でも……」

彼がそんな提案をしたとき、上着のポケットに入れていたゆりの携帯がぶるぶると振動した。それでようやく我に返る。

「は、長谷部です」

ゆりは一樹の腕から逃れ、電話に出た。高津からだ。彼の関西訛りの話し声を聞いたおかげで、ようやく仕事のスイッチが入る。

「……今、お支度をされています。はい……、すぐに降りますので……」

すでに車を回したという報告だった。ゆりは電話を切ってから目を閉じて深呼吸し、いちにのさん、で一樹を振り返った。

「高津様が下でお待ちです。急ぎましよう」

「今の電話、うちのマネージャーか？ なんで亮さんがお前の番号を知ってるんだよ」

亮さん……、というのは高津のことらしい。悪態をつく一樹に、ゆりは冷静に伝える。

「宿泊中の連絡をスムーズにするため、わたしの番号をお伝えしております。さあ早く」

「早くって……。なんなんだよ、急に……」

不満そうな一樹だが、ゆりの腕をつかんで彼女の腕時計を確認すると、急いでリビングルームのほうに引っ込んだ。すぐに彼は、スマートフォンとミネラルウォーターのボトルを手に戻ってくる。

「お荷物は？」

「これだけ。ほかはマネージャーが持って先に行ったよ」

「失礼いたしました」

「さっきの質問にまだ答えてもらってない。俺は初日だから早めに撮影が終わるんだ。夕飯に付き

合えよ？」

「できません」

「なんで」

「な、なんでって……」

ふたたび一樹が目の前を塞ぐように立ったが、ゆりはぐっと踏ん張る。

「福山様はお客様だからです。わたしは従業員ですから私的なお付き合いはできません」  
「私的なお付き合いって……。硬いなあ、お前」

一樹は不服そうだったが、すぐに苦笑いした。それからスリッパを脱ぎ捨て、シューズラックからパンツと同じ色のスリッポンを取り出し素足を入れると、生成り色のストローハットを頭にさせる。

ゆりは黙ってしゃがみ、一樹が脱ぎ捨てたスリッパをそろえた。

「でも、気が利く女になったんだな」

「あの頃のわたしではありませんので」

「ほーお」

冷やかすような口ぶりだが、時間が押しているのはわかっていられるらしく、素直に部屋を出てくれた。廊下を少し歩き、カードキーで従業員用のドアを開け奥にあるエレベーターに乗り込んだ。

「会えて嬉しいよ、ゆり。今日の撮影、頑張れそうだ」

エレベーターの壁に背を預け、一樹は腕組みしながらつぶやく。そのまま不躰なほどじろじろと、ゆりの頭のとっぺんからつま先まで眺め回した。

「お前の制服姿を見るのは高校のとき以来だな。あのときもだけど、その制服もよく似合ってる」  
ゆりは無言を貫いたが、一樹は勝手に話し続けた。

「どうしてお前が他人行儀なのかはわからないが、俺は違う。今のお前のことをもっと知りたい。だから、うんと言ってくれるまで食事誘うからな。だって俺たちは幼なじみなんだし」

ようやく一階に着いたので、ゆりはほっとしながら、一樹を伴いエレベーターを降りる。

廊下を進むと警備員の詰め所と通用口があり、高津はドアの手前で待っていた。

「長谷部さん、どうも……。一樹、早よしいや！」

「はいはい」

一樹は帽子を深くかぶり直したが、通用口を出る寸前で少しつばを上げ振り返った。

「今夜、電話するからな。ゆり。絶対に出るよ」

ドアに手をかけようとした高津が、きよとんとした顔でゆりを見る。

「違うんです。これは……」

「こいつ、俺の幼なじみなんですよ。学年は違うけど幼稚園から高校までずっと一緒に、両親も公認の仲」

一樹はゆりの隣に立ち、気取ったしぐさで彼女を指さす。

「幼なじみ？ 公認の仲っておい……」

「大丈夫。週刊誌にタレこんだりするような奴じゃないから。だろ？」

一樹は能天気な笑うと、少しかがんでゆりの顔を覗き込む。

目が合わせられない。恥ずかしすぎて、ホテルの客でなければ突っぱねただろう。

「福山様。お時間が……」

羞恥に耐えて彼を促す。

「わかったよ。……じゃあ、行ってくる」

一樹はちらりとゆりを見てからサングラスをかけ、戸惑い気味の高津を伴い、日差しの下へ出ていく。

ふたりの乗った大型SUV車が通りに出ていくのを、ゆりはくらくらしながら見送った。

ランチタイムの社員食堂では、ついにやってきたイケメン俳優の話題で持ちきりだった。

「背がすっごく高くて顔が小さいの。一樹すてきー！」

彼に朝食を運んだというウエイトレスが興奮気味に話している。ゆりはそう話していた彼女たちの一団に食事中のテーブルをぐるりと取り囲まれ、一樹について質問攻めにあい、彼を担当できることをうらやましがられたりした。

ゆっくりご飯も食べられない。

それだけでなく頭が混乱しているというのに。

流し込むように食事をとっていると、静香から電話があった。あとでオフィスに寄れとのことなので、食事もそこに逃げるように社食を出た。

「週刊誌の記者が来たんですってね？」

「ええ、はい……」

昼時のオフィスはがらんとしていた。静香はミーティングスペースにゆりを招き、コーヒーを振る舞ってくれた。

「ゆりちゃんが追い払ってくれて助かったわ。警備のほうは手を打ったから」

「そうですか。あの、マナージャー」

「なに？」

「……いえ。なんでもありません」

一樹の担当をはずしてほしい。過去を知る人物と顔を合わせたくない——。そう伝えたかったができなかった。自分を信じて任された仕事だ。きちんと全うまっとうしなくては。

「まだお迎えしたばかりだけど、福山さんが快適に過ごして東京に帰ってくれたら、きつと今後につながるわ。お互い精一杯のことをしましょう」

「……わかりました」

上司の言葉に、ゆりはただうなづくしかできなかった。

そのあとどうやって時間が過ぎたかよく覚えていない。就業中も、一樹の顔がちらついてならなかった。たった数分話しただけでこんなに動揺してしまうなんて、ゆりは自分で自分が信じられなかった。とにかく定時に仕事を終え、寮に帰ったのは午後三時半頃だった。ワンルームマンションを借り上げた独身寮は部屋が広いわりに寮費が安く、駅にも近いのでなにかと便利だ。

エアコンのスイッチを入れたゆりは、キッチンで手を洗うと、冷蔵庫から缶ビールを取り出し、立ったまま半分ほど一気飲みした。

——ありえない。こんなことって。

幼なじみのカズくんこと屋代一樹はゆりより二歳年上だから、今年で三十歳になる。福山一樹もそれくらいだ。メディアで何度も顔を見ていたのに、どうして同一人物だと気づかなかつたのだ

ろう。

お互いの実家は神奈川県鎌倉市（かまがら）にあった。ゆりはひとりっ子で、一樹には二歳上の兄がいた。母親同士が親しくしていたため、ゆりは屋代家の兄弟とは幼い頃よく一緒に遊んだ。ピアノやスイミング、英会話のレッスンなど、習い事もすべて同じ教室に通っていた。

今日話した印象では、一樹はあまり変わっていない。昔から自信家で生意気で、けれどゆりにはいつも優しくかった。兄のようでもあったし、王子様のような雰囲気を漂わせた自慢の幼なじみでもあった。

けれど大きくなるにつれて、彼はどんどん遠い存在になっていく。

中学ではあつという間にサッカー部のエースとなり、女子にモテモテ。成績優秀で誰からも一目置かれる存在となった。高校に入学すると彼の人気はさらに過熱し、他校の女子も含めたファンクラブが結成された。平凡で内向的な性格の自分との違いを思い知らされ、ゆりは彼とうまく話せなくなる。

一樹自身も、あまり話しかけてこなくなった。地味な幼なじみに周りをうろつかれたくなかったのかもしれない。こんなふうにして、ふたりは疎遠（そえん）になった。

そして高校三年生の秋――。両親が交通事故で他界し、ゆりは千葉の親類に引き取られた。鎌倉の家は人手に渡り、屋代家の人々ともそれを機に会っていない。

それからの十年は生きることに必死で、いつまでも引つ込み思案な少女ではいられなかった。相手に付け入れられないよう愛想笑いをやめ、課された仕事はなんでもやる。そんな女へと変わった。

今さら一樹と語り合いたいとは思わない。

容姿にも環境にも恵まれた彼と自分は進む道が違ってしまったのだから。

残った缶ビールを手にソファに腰を下ろし、まとめてあつた髪をほどいて仰向け（あおむ）に寝そべる。エアコンが効いて涼しくなったせいであつ、うとうととしてしまうと、テーブルに放ったバッグの中で社用電話が鳴っていることに気づいた。

ゆりは乱れた髪をかき上げ、シンブルなスマートフォンを手にする。

「はいっ、ホテル……エトワール。は、長谷部、でございます」

「なんだその間抜けな声は。お前、寝てただろう」

笑いのまじった声。一樹だ。十年ぶりの電話でもすぐわかる。優しいけど、よくこんなふうにからかわれもした。部屋の時計は夕方六時を過ぎている。たっぷり二時間は寝たようだ。

「寝不足なんです。ゆうべ、残業でしたから」

「……そうか、悪かったよ。手間は取らせない。少し話したら切るから」

「あ、いえ……」

素（そ）っ気ない返事をしたのに謝られてしまい、なんだか戸惑う。

「今日の撮影は完了。さつきホテルに戻ったとこだ。木下さんに聞いたらお前はもう帰ったって言われてさ。どこに住んでる？ 近くなのか？」

「申し訳ないのですが、今から言う番号にかけ直していただけますか？ この番号は仕事用なの」



いつ、呼び出しの電話がかかってくるかわからない。だから本意だが、プライベート用のスマートフォン番号を教えることにした。しつこくされたら着信拒否をすればいいし。

番号を告げると一樹はすぐに電話をかけ直してきた。

「嬉しいよ、ゆり。これで毎日気兼ねなくお前に電話ができる」

「シフト勤務ですので、いつも出られるとは限りません」

「じゃあ、留守電残す。暇になったらかけ直してくれ、お前から」

遠回しに拒否したつもりだが、彼には通じないようだ。面倒なので、ゆりは話題を変える。

「今、おひとりなんですか？ 高津様は？」

「自分の部屋で事務所に通話してる。お前にフラれたから、晩飯はほかの出演者たちとこの部屋で食べることにしたよ。木下さんがレストランに手配してくれてさ。あの人、親切だな」

「ええ……。面倒見のいい方です。わたしもよくしてもらってます」

「で、どこに住んでるんだ？」

ちやつかり話を戻される。諦めて、ゆりはしばしの間、彼に付き合うことにした。

「……社員寮です。ホテルの近くに借り上げのワンルームマンションがあるんです」

実家は十年前に他人の手に渡った。だからゆりには帰る家がない。寮を完備しているホテルは多いので、この仕事を選んだようなものだ。

「なるほど。ホテルって夜勤があるだろう？ そういえばお前、ご飯作れるのか？」

「月に一度くらいは夜勤をしますし、自炊もしています。こんなお答えでよろしいでしょうか」

「ふーん。しつかりやってるんだな」

「あの、福山様」

「一樹だよ。呼び方もだが、そのビジネスライクな口調をなんとかしろ」

「できません。お客様ですから」

「手ごわいなあ、お前……。いつからそんな頑固になったんだか」

呆れたような物言いが、声は穏やかだった。

「俺はただ、ゆりともっと話がしたいだけだよ。離れていた間どうしていたか、今のお前がどう過ごしているかとか、飯でも食いながら聞かせてほしいだけなんだ。お前が親戚に引き取られたあと、うちの家族はみんな、お前を心配してたんだから」

そう言われると、胸がきゅつとする。屋代家の人々は優しく、いい人たちだった。大きな家、大型犬が走り回る庭、四季折々の花や野菜を作る家庭菜園もあった。

でも、もう十年も前の話だ。ゆりは脳裏に浮かんでくる優しい隣人たちの面影を追い払う。

「お聞かせするほどのことでもないし、お食事をご一緒する時間もとれません」

「なんだその、かわいげのない返事は」

「もう、昔のわたしではないので」

「へえー」

一樹は唸り、しばらく黙り込む。

「強くなったんだな。俺の知ってるゆりは、いじめられても言い返せないような女の子だったのに。」

わかった、この話はまた今度にしよう。明日の朝も会えるよな」

「え、はい……。朝はわたしがお部屋にお迎えにうかがいます」

「よかった。じゃあゆり、少し早いがおやすみ。疲れるところを悪かったな。ぐっすり寝ろよ」

「福山様……！」

「だーかーら。……一樹だ」

名前の部分をささやくように言うと、彼は電話を切った。

も、もう——！

ゆりはつかんでいたスマートフォンを床に置く。くすぐったいようなもどかしいような、なんともいえない気持ちが込み上げる。仕事漬けの日々を過ごす自分が、久々に感じた心のざわつきのよなもの。

でも彼はホテルが迎えたVIPだ。公私混同はできない。自分の役目は彼を丁重ていじゆうにもてなし、満足して東京へ帰ってもらうこと。

二週間の我慢だと自分に言い聞かせた。撮影が終われば彼は東京に帰る。それまでの間、心を無にして過ごせばいいだけだ、と。

翌朝出勤すると、七時過ぎに一樹の部屋からコールがあった。彼は昨日とは違って、身体にぴたりとフィットする黒いTシャツに、くるぶし丈のスリムなジーンズ姿でスイートのドアを開けてくれた。

「おはよう、ゆり」

「おはようございます、福山様」

ゆりは普段どおりに挨拶あいさつしたが、顔を上げたとき目の前に盛り上がる胸筋があり、ドキリとする。一樹はぱっと見は細身なのに、こんなシャツを着るとびっくりするほど逞たくましい。そして今日も、控え目ながらもうつつりしそうな甘い香りをまといている。

「またフクヤマ様……。嫌がらせか、それ」

「いえ、お仕事です」

「ふーん。プロ意識が高いな」

「ありがとうございます」

やり取りが聞こえるのだろう、リビングのほうから高津の忍び笑いが聞こえた。

「九州は残暑が厳しいから、正直このロケは気が重かったんだ。けどこうして毎日、仏頂面ぶつていめんとはいえお前に会えるから元気が出るよ。この仕事、受けてよかった」

——わたしと会々と元気が出る？

一樹はどろけるような笑顔をゆりに向けた。またしても心が乱れそうになる。

落ち着け、ゆり——

相手はプロの俳優なのだ。甘い表情を浮かべるなどお手のもの。仕事柄、染み着いた癖のようなもので、自然とこういう顔をしてしまうに違いない。もしもほかの従業員だったら、勘違いさせてしまう可能性がある。まったく人気俳優とは、罪作りな存在だ。

ゆりは小さく咳払いすると、なるべく一樹と目を合わせないようにして男たちを階下へ案内する。通用口を出ようとした一樹に笑顔で手を振られ、こつそり「今晚、また電話する」と耳打ちされても、いつもどおりのお辞儀で見送った。

夜になり、ゆりが自宅で寝る準備をしていると、予告どおりに一樹から電話があった。「なにかお困りのことでも?」

「別に。ゆりの声を聞きたいだけだよ。撮影が長引いたんだ。癒しがほしいから少し付き合えよ」彼の声には疲れがにじんでいた。残暑が続く中、早朝からこんな時間までの撮影はさぞ大変なことだろう。これも仕事のうちだと割り切り、撮影の様子について語る彼に一時間ほど付き合った。

やがて――

「……で、飯はいつにする?」

「一緒にできません。何度誘われても答えは同じですから」

ゆりは丁寧に断りの言葉を告げる。

「ブレない奴だな。いいさ、また明日誘うから。じゃあ、おやすみ。ゆり」

「おやすみなさいませ……」

カズくん……、なぜだかその名を口にしそうになり、慌てて呑み込んだ。

こんな調子で一週間が過ぎた。木曜日の朝、いつもの時間にスイートに向かう。

「毎日すみません、長谷部さん。フロントのお仕事もあるつのに」

顔を合わせるなり、高津にお詫びされる。一樹はベッドルームで着替え中だった。

「いえ。これも業務の一部ですから」

「そう言ってくれはると助かります。あいつも長谷部さんが毎朝見送ってくれるのが嬉しいらしくて、撮影でもほとんどNG出さずに頑張ってるんですよ。ほんまに単純な奴です。ははは……」

単純って……。一樹と高津は、まるで友達のように気安い間柄だ。それはお互いに信頼し合っているからこそ成り立つものだと思うし、昔から形式に囚われない一樹らしい関係だと感じた。

ドラマというのは一樹が扮する一流シェフが、旅先で次々起こる殺人事件を解決していくという、シリーズ物のミステリードラマだ。

ここから車で二十分ほどの場所にある高級旅館の離れを借りて撮影が行われている。そちらでメディア対応もしているので、ファンやマスコミ関係者も向こうに集まるらしい。だからだろう。あれ以来、記者は見えていない。

「しかし長谷部さんが一樹の幼なじみだったとは、驚きです。食事の件ですが、都合がつくなら付き合ってください。こちらとしては、まったく問題ありませんから」

あまりにも呑気な発言を聞き、ゆりは目を丸くする。問題、大ありだろう。一樹も高津も脇が甘すぎて心配になってくる。俳優は人気商売なのだから、イメージ維持のために、たゆまぬ努力をするべきではないのか。ゆりは高津を見据えて言った。

「お言葉は嬉しいのですが福山様はお客様ですので、その件は辞退させていただきます。万一マスコミ関係者にキャッチされて、面倒な事態になっても困りますし」

高津は目を丸くした。まるで福山一樹の誘いを断るなんて、どうかしてるぞでも言いたげだ。「はは、ははは……。おっしゃるとおりです……。でも噂になっても、長谷部さんならええんちゃうかな……?」

「はい?」

「ああ、いえ、こっちの話です。おーい、一樹。そろそろ時間やぞ」  
相変わらずのほほんとした調子で、高津は一樹を呼びにいった。

ふたりが無事に出発したのを見届けオフィスに戻ってみると、中園綾子が待っていた。綾子はこの一週間、休暇をとっていたようで久しぶりに顔を見た気がする。一樹のお世話係をさせてもらえないと知った彼女は、不貞腐れてバカンスに出かけたと風の噂で聞いていた。

「ずいぶんカズキと仲良いんだねー。見てたよ? 通用口で」

彼女は腕組みして、ゆりをにらむ。

「彼、毎朝アンタに手を振りながら出かけていくんだってね。すっかり気に入られてるって、警備の人が言ってた。もしかして最初から彼に取り入るつもりだったの?」

「毎朝顔を合わせるうちに打ち解けてくださっただけよ。気さくな人みたいで」

平然と言い返したものの、毎晩一樹と電話で話していることを思うと、少しだけうしろめたい。

「そうなんだ。ねえ、そんなことより、一日だけでいいから私と担当を代わって。クラブフロアに入るキーを貸して」

この発言にはオフィスにいるほかの従業員たちが、またかという顔でこちらを向いた。ゆりは、うんざりしてきた。

「代わるのは構わない。でも、あなたが直接木下マネージャーに許可を取って」

「こっそり代わればいいじゃん。アンタが遅刻して、代わりに私がスイートに迎えに行くの。正面から許可を取りにいつても、どうせあのオバサン、うんとは言わないよ。アンタと同じで頭が固いから」

綾子は吐き捨てるように言う。オバサンとは静香のことを指しているのだろう。

「悪いけど、わたしはわざと遅刻したり、上司の指示を無視したりとかしないから」

「ほーら、頭が固い……。ていうか優等生気取りなんだ」

「好きに言えば。鉄仮面でも優等生でもなんとでも」

くるりと背を向けると、綾子はゆりの前に回り込んだ。

「ねえ、ほんのちよつとでいいから……。十分、いえ五分でもいいから彼に会いたい」

「だから……。マネージャーに頼んで。わたしにそんな権限ないし」

「……もう。融通が利かないんだから。いいわよ、ほかの人に頼むから!」

大声で言い、綾子は怒ってオフィスから出ていった。

「ひゃー、感じるー。ゆりさん、大丈夫ですか?」

うしろから声がして、新條がドアからひょっこり顔を出した。今日は彼と一緒に早番だ。

「大丈夫よ。それより、フロントは大丈夫?」

「今、主任が来てくれました。資料を取ってこいって、頼まれたんですよ。ゆりさん、あの人には気をつけたほうがいいですよ」

「あの人。ああ……、中園さんね」

「うん……」

新條はゆりのそばまで来て、心配そうな顔でうなづく。

「中園さんはゆりさんに嫉妬しつとしてるんですよ。クールなのにモテて周りから頼りにされてる。相当ライバル心を燃やしてますよ。社長の親戚だし、あまり怒らせないほうがいいです」

「ライバル心って言われても……。同じ部署じゃないし」

「それはそうなんですけど、なんかそのうち爆発しそうで怖いなあ……」

新條はゆりを心配してくれているのだ。こういうところは彼のよい一面だと思う。

「大丈夫よ。バツクに社長がいるからって、わたしを追い出したりはできないから」

ゆりは毅然きぜんと言いう。いくら嫌いな同僚だからと言いって、さすがにそこまでしないだろう。社長も経営者だから分別ぶんべつはあるはず……。と、そのときは思ったのだが――

金曜日の午後、今後について人事部長と面談した際に、ゆりは衝撃の事実を告げられる。

「君との雇用契約は更新しないことが決定した。十月末で契約が切れる。そのあとは自由だから」

「はい？」

「十一月からは自由だと言いったんだ。残った有給は買い取りもできるが、消化するほうがいいん

じゃないか？ 仕事もだが、寮を出なくちゃならないので、住まいも探さなきゃならないだろ？」

最後のほうだけ人事部長は憐れあはれむような口調になる。

つまりクビだ。さあつと、全身が緊張した。

「理由を教えてください。わたしになにか落ち度があったのでしょうか」

「これは社長の言葉だが、君は職場の和を乱していると、現場から強い訴えがあったそうだ」

「和を乱す……？」

「そうだ。思い当たる節むせがあるだろう」

人事部長が気まずそうな顔をする。その様子を見てピンときた。社長と直接対話ができてなおかつ、ゆりに不満がある者――綾子だ。

なるほど、そういうことか。新條の心配が現実になったらしい。だとしたら、どうあがいても無駄だろう。

ゆりは目を閉じて心を落ち着け、やがて顔を上げた。

「わかりました。では有給は使わせていただきます」

それだけ言って、会議室を出る。廊下の壁に背中を預け、思わず天井を見上げる。

家を探さなきゃ――

仕事もだが、まずは住まいだ。ゆりは思わずため息をもらしていた。

勤務時間が終わる頃には、ゆりの退職と、その原因が綾子ではないかという噂が社員の間に広

まっていた。

なにも聞かされていなかった静香は、人事部長に説明を求めに行ったが、結果は変わらなかった。インカムや携帯には同僚たちからのメッセージが相次ぎ、新條からは今夜フロントのメンバーで集まろうと誘われた。けれど今後のことを考えたいからと断り、定時で上がったゆりは駅前をぶらついてから寮に戻った。

みんなは騒いでいるが、不思議と怒りは感じていなかった。綾子への接し方を間違えた自分が悪いのだ。氣遣ってもらえるのは嬉しいのだが、この辺が諦め時なのだろう。

コンビニで缶ビールとつまみを買って飲みながらパソコンで転職サイトを開き、あてもなく検索を始める。

そのとき、スマートフォンが鳴った。一樹からだ。

「聞いたぞ。クビになったって?」

一樹はいきなりそう切り出した。今日の午前中に都内で仕事があるとかで、彼は昨夜のうちに東京へ戻っている。予定では今夜また別府へ来ると聞いているが。

「今、どちらですか? どうしてそれを……」

「さつきホテルに戻ったとこ。このあと晩飯を兼ねて、スタッフと俳優陣でミーティングがあるんだ。プロデューサーがいい店を押さえてくれたらしくて」

そう前置きしてから、一樹は興味深いことを言う。

「いつもはホテルに着くと木下さんが迎えに来てくれるんだが、今日は中園さんという若い女子

だった。彼女からお前の悪口を延々と聞かされたよ。鉄仮面だの仕事人間だのと……。しかもホテル従業員としてあるまじきことに、俺と一緒に写真を撮りたいと言出す始末。まあ、断ったけどな」

「中園さんが」

「ああ。このスタッフはプロフェッショナルが多かっただけに、躰がなっていないで驚いたよ。

彼女、新人だろ? もっと教育してから現場に出さないと、俺じゃなければクレーム出されるところだぞ?」

「申し訳ありません。じゃあ、退職のことも彼女から」

「別にお前を責めてないよ。だが退職のことは彼女から聞いた。十月でサヨウナラだと言ってたな。で、お前、このあとはどうする。別府で職探しするのか?」

——綾子め。

そんな内輪の話を、どうしてゲストの前でするのだろう。

「あと一カ月あるのでゆっくり考えます。大丈夫、いざとなれば、どんな仕事でもしますから」

「いつそ帰ってこいよ、東京に」

「え?」

「お前の力になるよ、家も仕事も全部面倒見てやれる。だから俺を頼れ。昔みたいに彼を頼る? 昔の……子どもの頃のように?」

思わず、どきりとする。一樹のことは確かに昔から知っているが、十年も会っていなかった相手

だ。彼に負担をかけるだけのこの申し出を、受けるのは気が引ける。

「できれば会って相談したいな。明日の午後、時間取れないか？ 会わせたい人がいるんだ」

「福山様、個人的にお会いしたりはしないと……」

「いい加減、福山様はやめろ。俺は一樹だ。お前の幼なじみのカズくんだって」

怒ってはいない。むしろ彼は笑っていた。不思議と胸のつかえが取れていくように感じる。

「お客様とは距離を保つ……。そのプロ意識は立派だが、そうして尽くしてきた会社がこの仕打ちだ。これ以上、義理立てする必要もないだろう」

そう言われると心が揺れた。理想を言いたても仕方ない。家も職も失った状態では生きていけないのだから。明日は久々の休みだ。就活だと思つて話を聞いてみようか。

「わかりました。待ち合わせは何時にいたしますか？」

一樹の誘いを受ける形で、土曜日の午後三時、ゆりは別府駅のバスターミナル付近で、高津の運転するSUV車に乗り込んだ。

一樹が「会わせたい」と言っていたその人物は、後部座席に悠然と座っていた。ふくよかな顔を女優のようにメイクし、髪は華やかにアップ。シートベルトがはち切れそうな堂々とした体躯に、ブルーのロングドレスをまとっていた。

——女……？ にしてはガタイがいいような……

目が合つてゆりが思わずひるむと、相手は大きなサファイアの指輪をはめたふつくらとした手を

口元に添えた。

「言っとくけど男よ。でもゲイじゃないの。女装家つてことにしといて」

「は、はい……」

野太い声だ。そして妙に貫禄がある。

「まあ、おかけなさい。すぐに車を出すから」

男は芸能プロダクション「アデル」の社長で、安住輝彦と名乗った。ゆりは先に乗っていた一樹と並んで、対面するように反転させたシートに座る。一樹は撮影から直行したらしく、涼しげな麻のジャケットを着て髪をスタイリッシュにセットしていた。

テレビで見た人気俳優、福山一樹がそこにいる。

助手席には安住の秘書だというスーツ姿の男性もいて、五人が乗った車は土曜の午後の街を、海とは反対方向に走りだす。すぐに安住が口を開いた。

「正直、こんな美人さんとは思わなかったワ、一樹。しかもマジメそうだし」

「マジメを通り越して、堅物ですよ。こいつ」

「へえー。そうなの……。こんなところに呼び出してごめんなさいね、ゆりさん。でも人には聞かせられない話なのよ。手短かに説明するからしばらく我慢して」

「はい……」

「あなたのことはすべて一樹から聞いたワ。住む場所と仕事を同時に失くすなんて大変よね。それをふまえての提案なんだけど。アナタ、一樹の彼女にならない？」

——え……？

「彼女？ 恋人という意味の彼女……ですか？」

「そう。ただしニセモノの彼女よ。一樹のマンションと一緒に住んで、たまーに街に出て一樹とイチャイチャして、彼女のフリをしてマスコミに写真を撮られてもらいたい」

「一緒に住んで写真を撮られる……？」

びつくりして、思わず隣の一樹を見た。ゆうべの電話で、力になると彼は言った。これがそうなのか？

「落ち着け。あくまで彼女のフリだ。一緒に住むと言っても部屋は別だから」

一樹は冷静だった。

「引き受けてくれるなら、代わりにタダで部屋を提供するよ。生活費はすべて出すから家事もやってほしいな。ホテルマンだし、お前そういうの得意だろ？ まあ、住み込みの家政婦みたいなもんだ」

悪くないだろう……？ とほほ笑んでから、一樹はふいに顔を曇らせる。

「実は今年の春頃、俺が二十歳のモデルと熱愛中だという記事が三流週刊誌に出たんだ。もちろん事実無根で釈明会見も開いたが、いまだに疑ってる奴らがいる」

「もしかして、うちのホテルに現れた記者の方々ですか？」

「そう。週刊ゴシップ。ほんとにムカつく奴らだ」

一樹は忌々しそうに髪をかき上げた。安住が補足する。

「記者にも辟易へきえきしてるけど、お相手の事務所の社長を怒らせたことが大問題なのよ。あちらの社長さんは芸能界のドンと呼ばれる人で、自分の秘蔵っ子の初スキャンダルにカンカン。ほんとになにもなかったのかまだ疑ってて、このままだと一樹の仕事に圧力をかけてきそうで怖いのよ……」

安住の柔らかい仕草と野太い声があまりにもミスマッチで、今ひとつ危機感がないのだが、ゆりにはだんだんと話が見えてきた。

「つまりわたしが福山様の同棲中の彼女のフリをして、モデルの方とはなにもないんだと、あちらの社長や世間に知らしめればいい……、ということでしょうか」

「そう、そうなのよー。もう、ゆりちゃん頭よすぎいー」

安住はシートから身を乗り出すようにして歓喜かんきした。大柄な体躯たいくが動いたせいで、気のせいか走行中の車が弾んだように感じられた。

「でも、今度はわたしとの熱愛報道でマスコミに追われると思うのですが」

「それはなんとかなる。とりあえず向こうの社長の怒りをしずめることが大事なんだよ」

一樹は言った。なるほどと、ゆりはうなづく。

「だとしたら、ほかに引き受けてくださる女性はいくらでもいそうですね。なぜわたしに……」

「それはアナタがプロ意識の高いお嬢さんだからよ。もう、わかってるでしょ？」

安住は少しだけ意地悪そうな顔をした。

「ホテルの仕事は完璧で、一樹を前にしても色目を使わない。ひとり暮らしで、きちんと自炊しずいもしてる。そんなアナタなら一樹のお世話も含めて役目を全うまっとうするだろうって高津が言うの。でも一番



の理由はアナタがいつて、一樹が言ったことかしら。幼なじみのアナタを信頼してるのね」  
「そうおっしゃいますも……」

顔が引きつりそうになる。褒めてもらったのは嬉しいが、十年も会っていないかった自分を、こんな簡単に信頼してしまうなんて、一樹は警戒心が足りない気がする。それにこの取り引きに応じたら、マスコミに狙われることになるのだから、それなりにリスクがある。

「もちろんお願いするからには、きちんとお礼はするワ。モデルとの噂を完全否定することに成功したら、それなりの金額をお支払いする。その後も、お望みであれば次の仕事もお世話するわよ。こう見えて、うちはいろんな事業を展開してるんだから」

自慢げに言ってから、安住はようやく表情を引き締めた。

「これはビジネスよ。彼女、という仕事をして成功報酬を得る。どう？ 悪くないでしょ？」

「彼女、という仕事？」

「まあ、プロ彼女、ってとこだな」

黙って聞いていた一樹が、そうつけ足した。

プロ彼女——。以前どこかで聞いたことがある意味とは違うものの、依頼された内容的にそうとも呼べる。いずれにせよあまりいい意味合いではないが、報酬がもらえると背に腹はかえられない。別に一樹の愛人になれというわけではなさそうだし、考えてみてもいいかもしれない。

「もちろん、お前のプライバシーは守るよ」

考え込むゆりの不安を拭い去るように一樹が言う。

「その点は万全を期す。なにかあっても俺が絶対にお前を守るから」

「福……、いえ、一樹さん」

一樹のストレートな物言いにはいまだに慣れないが、心は少しずつ固まってきた。

「とりあえず今夜ひと晩考えてみない？ あたし、今夜は仕事で博多に泊まるの。明日の朝にでも返事をくれたらいいから。ね！」

安住がそう言ってくれたので、ゆりはお言葉に甘えることにした。

車は、午後四時には由布院に着いていた。秘書を伴い、異装のまま博多行きの特急電車に乗り込んだ安住を駅で見送り、高津ともいったん別行動をとることにした。ゆりは一樹とふたり、観光客でにぎわう由布院のメインストリートに向かう。週末の原宿に比べればどうってことない人出だが、それでも人目を気にしないわけにはいかない。

「ビクビクするな。普通に前を向いて歩け」

一樹はただサングラスをかけただけで、平然と歩いていく。ゆりもサングラスとキャスケットを目深にかぶって、背の高い彼のうしろを歩いた。足が長くて見とれてしまう。中学時代たまに一緒に下校したが、並んで歩くことが自慢だったのを思い出す。

ネットの情報では、一樹は大学二年のときにモデルとしてスカウトされたとあった。ちょうどゆりの両親が亡くなった頃だ。葬儀の日に彼はゆりの肩を抱いて、ずっと慰めてくれたのだが、もしかしたらそのときにはすでに、今の事務所と契約していたのかもしれない。

当時のことを思い起こしていると、一樹は立ち止まり手を差し出してきた。ゆりは黙って首を横に振る。

「昔はよく手をつないだのにな」

「もう、子どもじゃありません」

「だからって、仲良くしちゃいけないわけじゃない。お互い独身だし、義理立てする相手はいないし……、あ、いないよな？」

いまさらそれを聞くのかと思つたが、ゆりは素直に申告した。

「いません。仕事ばかりしてる女は嫌われるので」

「なんだそれ」

あつげらんかと笑つた一樹の声を聞きつけたのか、前を歩いていた女性グループが振り返つた。ゆりは慌てて一樹の腕を引き、横道に入ったところにあるカフェに連れていく。古民家を改装した和モダンなカフェの店内は、夕方だからか、人がまばらだつた。

「ふーん。落ち着く店だな。よく来るのか？」

青々とした芝庭を眺められる窓際席に案内されると、彼はそんなふう聞いてきた。カップルシートのようなボックス席で、庭園に向かつて並んで座る。

「休みの日に、たまに。人気店らしいですが、平日はたいてい空いてるんです」

「わかる。俺も平日に休みが入ることが多いんで、ふらりとどこかに行くんだ。お前、こっちの生活になじんでるんだな」

「ええ。二年もいますから……。親もいないし、行つたことのない街に住んでみたかつたんです」

綾子とはそりが合わなかつたが、職場にも同僚にも恵まれた二年だつたと思う。

そこでオーダーした飲み物が届く。店員が去ると、一樹はサングラスを外した。ゆりもそれにならう。

「偉いな、頑張つてきたんだ」

「まあ、自分が頑張るしかなかったの……。わたし、この夏で奨学金の返済が終わつたんです。今まで少し無茶して働いたけど、頑張つてよかつたと思つてます」

「ゆり」

「わたしの子どもの頃の夢を覚えてますか？」

「ケーキ屋さんだろ？」

自分で質問したものの、覚えていてくれたことに驚いた。一樹は冷えたコーヒをひと口飲んで至福の笑みを浮かべると、テーブルに頬杖をついて誘惑するような色っぽい目で見つめてきた。

「でも幼稚園のときにはカズくんのおよめさんになりたいって言つてくれたよな。兄貴が悔しがつて泣いたのを覚えてる」

「そんなこと、ありましたっけ？」

ゆりもカフェラテをひと口飲み、記憶の糸をたどる。一樹の兄は大樹という名だ。社交的な弟と対照的にクールで寡黙な青年だつた。

「なんだ、笑えるじゃん」

「え？」

自分でも気づかぬうちに、ゆりは笑みを浮かべていたらしい。恥はずかしくなっつてつい、片手で頬を押さえてしまう。

「やつと、俺の知ってるゆりに会えた気がするな。ホテルにいるお前は、いつもすましてる」「いえ……、これはその……」

ゆりはもうひと口カフェラテを飲み、呼吸を整えた。

「か、一樹さんの夢はサッカー選手になってワールドカップで優勝することでしたよね。だからわたし気づかなかったんです、あなただって」

「嫌なことを思い出させるな。大学に入ったとき、自分の限界を思い知ったんだよ」

「ちつとも恥はずかしいことじゃないです。ワールドカップは無理だとしても、人に夢や希望を与え、素敵な仕事についてる。わたしの子ども頃の夢——キーキ屋さんになる夢は、今からでも叶うでしょうか？ 東京で再出発して、学校に通い直せばわたしも……」

話しているうちに、ゆりの心の中に様々な思いが渦うず巻く。とつくの昔あきりに諦めてしまっていた夢。それにもう一度、自分も手を伸ばしてみてもいいような気がしてくる。一樹といると、幸せな未来を描いていた頃の明るく前向きな気持よみだえちが蘇よみがえった。

「ゆり」

もう一度呼ばれ、ゆりは隣に座る幼なじみの顔を見つめる。

「ほんとうに、ただでお世話になっていいんですか？」

「もちろん。空あいた時間は好きなことをしていいよ」

「アルバイトをしても？ お金を貯めて、いずれパティシエになる専門学校に通うのはどう思います？」

「ぜんぜん悪くない。クールだな」

笑われなかったのでほっとした。

「じゃあ……確認なのですが、彼女のフリって、たとえばどんなことをすればいいのでしょうか」

「俺と一緒に人ごみを歩くだけでいいだろう。俺は顔出しするが、お前は変装したらいい」

「それだけ、それだけでいいんですか？」

「ああ。スパーの袋を提さげて、恋人つなぎをして同じマンションに出入りしていたら、普通は同棲してると思うだろうな」

頭の中でイメージする。夜の繁華街を、彼と手をつないだり腕を組んだりして歩くのだ。大丈夫、きつとできる。相手は彼だ、知らない人じゃない。そう考えるとなぜか安心できた。それにこれはビジネス。自分に課せられた仕事だと思えばいい。

「熱愛報道を完全に消し去れたら、そこで終わりにしていいのですよね」

「ああ。うちの社長のことだから、その辺の契約はきちんと書面にまとめるよ」

「わかりました。ビジネスですよ。ではお受け……」

「待って待って……！」

一樹が目を丸くして遮おさった。

「ひと晩考えなくていいのか？ 朝になったら気が変わるかもしれないぞ」

「変わってもいいのですか？」

「いや、困る」

「だったら、わたしの気が変わらないうちに安住社長にご報告しましょう」  
プロ彼女、お受けしますと。

## 第二章 仕事のためならなんでもします

十一月、東京。

屋代一樹がゆりと「プロ彼女」の契約をして一カ月と少しが過ぎた。十一月に入ってからすぐのある日の午後、彼はテレビ局内の楽屋で打ち合わせをしていた。このあと、トーク番組の収録がある。映画の宣伝で訪れていたドイツから、今朝帰国した。長時間のフライトから仕事に直行したせいか、頭がズキズキする。しかし、夕方まで予定がびつしりだ。

「もう一度確認んだけど、一樹くんの恋愛についての質問も大丈夫だよな？」

テーブルの上に開いた台本をペンで指しながら、男性ディレクターが念を押してくる。トークの後半ではMCが、一樹の恋愛観や結婚について質問する流れとなっているのだ。

「全然OKですよ。なんでもどうぞ」

一樹は余裕の笑みでうなづく。デビュー以来その手の質問はずっとNGだったが、例のニセの熱愛報道を完全に打ち消すために、事務所が方針転換したのである。

「ずばり、彼女はいるのかどうかも聞いちゃうよ？」

「どうぞどうぞ。今まで話さなかったことも今日は話しますから」

頭痛を我慢してにつこり笑うと、隣で高津がこくこくと首を縦に振った。筋書きはもうできている。人気俳優、福山一樹には遠距離恋愛中の恋人がいる。相手は年下の一般女性だから、実際は極秘裏に続けていた。

しかしモデルとの熱愛報道が出たことで彼女が心を痛め、一樹はそれが誤報だということを世間

に証明するためにも、恋人の存在を公表する決意をした――

これが、安住社長の考えたストーリーだ。

――まあ、悪くないな。

一樹はテーブルに頬杖をついたまま、にやりと口角を上げた。

別府のホテルを辞めたゆりは、おととい一樹のマンションに越してきた。あんなホテル、有給を使つてさつさと辞めてしまえと言つたのだが、仕事を探す手間が省けたからと、彼女はぎりぎりまで勤務することを望んだのだ。

一樹は今日まで留守にしていたので、事務所のスタッフが彼女をマンションに案内してくれた。今朝から何度か電話をしているが、特に困つたことはなさそうだった。ついでに、このあとの収録で交際の恋人の存在を明かすことも伝えている。

「それを聞いて安心したよ。今日の一樹くんはいい顔してるしね。本番もこの調子で頼むよ?」  
「ええ」

一樹が返事をする、ディレクターはようやく台本を閉じた。

「じゃあ、準備ができたら呼びにくるから、もう少し待つてね。たーのしみだなあ」

ホクホク顔のディレクターは、スキップしながら楽屋を出ていった。

――任せとけて。

番組の放送は来週だが、それまでに「あの福山一樹が恋人の存在を明かす?」のような予告編がガンガン流れ、もしかしたら今日中には、関係者の口からマスコミへのリークがあるかもしれない。本命の彼女は誰なのか、一樹はふたたび週刊誌の記者たちにマークされることになるだろう。

さつそく今夜から、ミッションスタートだ。

今日は仕事が早く終わるので、帰つたらゆりを連れて街に出ようと思う。うまくマスコミがキヤッチしてくれたら、同棲を匂わせる発言をするのだ。

「楽しみなんは、ええねんけどな」

ふたりきりになったところで、高津はぶつきらぼうに口を開いた。

「何度もゆうてるが、長谷部さんのことは芝居やからな。フェイクやぞ。手は出すなよ」

「なんすか、急に……。それくらいわかつてますよ」

一樹は打ち合わせ用の椅子から立ち上がり、壁際に置かれたソファに腰を下ろす。

「言つたでしょう。ゆりは幼なじみだから……」

「それは何度も聞いた。美人の幼なじみがいて、うらやましいわ。けどな――」

高津も立ち上がり、一樹に歩みよる。

「ニセモノ彼女をやつてもらうだけやつたらええよ。お前が真剣に頼み込むから社長を説得するのに力を貸したけど、俺やつてほんまは同居までする必要ないと思つた。なんでそこまですんねん。」

下心ありありやる」

「ルームシェアくらい、いいでしょ。今度のマンシオンは広いんだから」  
声を荒らげかけたマネージャーをなだめるように、一樹は呑気に言う。

熱愛報道が出た直後、マスコミがマンシオンに大挙して押しかけ近所に迷惑をかけまくった。仕方なく、釈明会見の直後に警備員が常駐する今のマンシオンに引越したのだ。

「俺としてはただ、あいつを助けたいだけです。今まで苦労してきたんだから」

一樹は目の前のテーブルに置いた、ミネラルウォーターのボトルに手を伸ばす。

幼い頃のゆりは、常に一樹と兄の大樹のあとをくつついて回る、無邪気な少女だった。かわいいがどこか不器用で、転んでは泣き、慰めてやるとすぐ笑顔になる。

そんなゆりの面倒を見てやるのが好きだった。頼りにされることが嬉しかったのだと思う。妹のようであり、守るべき大切な存在でもあった。しかし高校に入ると、彼女は一樹のファンだという女子から嫌がらせを受けるようになり、やむなく一樹はゆりと距離を置くようになる。

嫌いになったわけではない。でもゆりを守るには、それが一番だと当時は思ったのだ。その結果ふたりの距離感が変わっていき、やがて事件は起こる。

「あいつが高校三年のとき、借金を残して両親が死んだことは知ってるんでしょ？」

「あ、ああ……」

高津は神妙な顔でうなづく。

「長谷部さんには悪いが、調べさせてもらった。お父さんは経営していた会社を乗っ取られるよう

な形で社長の座を追われ、そのあと新しい会社を立ち上げたが軌道に乗らず、負債を抱えたまま亡くなったんやろ？」

お気の毒に……と、高津はつぶやく。一樹の脳裏に、ゆりの両親の葬儀の日が思い浮かんだ。

「そう。家も保険金もすべて借金のカタに持ってかれた。ゆりは一文無しで世間に放り出されたんだ。助けてやりたかったけど、俺もうちの親も励ましてやるくらいしかできなくて」

屋代家でゆりを引き取りたいと申し出たが、結局ゆりは遠縁の親類に引き取られ、二十歳のときにその親戚宅を出て以降、行方がわからなかった。風の噂で日比谷のホテルで働いていると聞き、何度か足を運んだが、残念ながら彼女に会うことはできず――

後悔を引きずったまま、いつしかゆりのことは、記憶の奥底に沈んでいった。でもあの日、別府のホテルで彼女は一樹の前に現れた。

美しく、毅然と、颯爽と。

再会は運命だったのだろう。ハートを鷲掴みにされた一樹は、今度こそゆりを離してはならないと心に決めた。その矢先、ゆりが仕事と家を失うと知り、ニセモノ彼女役を任せたいと安住に提案したのだ。

ダミーの恋人を用意することは、もともと社長が言い出したのだ。ただ安住は、ゆりを彼女にすることは賛成してくれたが、同居には反対だった。それを高津が仲立ちする形でなんとかOKが出たのだ。そして社長はすぐに別府に来てくれた。

「言いたいことはわかった。今度こそ助けてやりたい、罪滅ぼし、ただの同情ってことやな」

「そうそうそう。亮さん、深読みすぎです」

「熱愛報道にケリがついたら同居は解消。それでええな？」

「いいですよ」

「結婚なんか絶対にあかんぞ？ まだそんな時期ちゃう。そこんとこ、忘れんように」  
「結婚って……。はいはい、絶対にはいけませんよ」

いくらなんでも先走りすぎだ。一樹は大げさに首を縦に振った。ただ、手を出さないと保証できない。お互い子どもじゃないし、ゆりはあんなにきれいだし。

あのときは、なかば勢いでプロ彼女の件を持ち掛けた。撮影が終わり東京に戻ってからの一カ月間は、電話でしかコミュニケーションをとっていない。でも毎日ゆりの声を聞いていると、会いたい気持ちがあんまり募った。

おそらくゆりは一樹を男として見てはいないだろうが、一樹は相手がゆりなら特別な関係になってもいいと思っている。けれど今それを口にする必要はない。

高津はなおも疑っているようだったが、やがて表情を緩めた。

「それやったらいい。お前を信じる……。あ、ほら。出番ぞ」

ドアがノックされ、女性ADが顔を出した。

「福山さん、お願いします」

「はいはい。ただいまうかがいます！」

調子のいい返事をして高津が荷物に手を伸ばす。一樹も立ち上がり、楽屋を出た。ADのあとに

ついて歩いていくと、廊下の角で、ガヤガヤと話しながら歩いてきた集団と鉢合わせした。

「わー、一樹くんだあ！」

鼻にかかった声を上げて、集団の中からひとりの女性が駆け寄ってきた。小野エレナ、二十歳。

ハーフの人気モデルにして、テレビのバラエティ番組にも引っぱりだこなタレントだ。大手芸能事務所「オフィス明智」所属の彼女は、芸能界のドンと呼ばれる明智光太郎社長の秘蔵っ子と呼ばれ、一樹の熱愛報道の相手だった。

「おっと、すんまへんなあ……」

危険を察知した高津が、彼女をブロックするように一樹の前に立ちふさがった。双方の事務所は面識のない相手だと熱愛報道を否定し、あれ以来共演はNG、どこかでニアミスしないよう気を配ってきた。それなのに、こんなところではったり会うとは。

「一樹くんはなにかの収録？ エレナは向こうでねえ……」

明るい無邪気な声で近寄ろうとするエレナに、一樹は冷やかな声で告げた。

「すみません、急いでるんで……」

「えー？ 行っちゃうの？」

鼻にかかった声に、一樹はつい立ち止まる。そして冷たい声で言う。

「二セの熱愛報道を収束させようとして、お互いの事務所が手を尽くしたのを忘れたんですか？ こんなところで俺を呼び止めたら、またあることないこと書かれますよ」

俺を怒らせるなど、言外に込める。すると突然、エレナのマネージャーらしき女性が進み出て頭

を下げた。

「も、申し訳ありません！ エレナ、ほら……」

彼女は急いでエレナの腕を引く。

「ちよつと声かけただけじゃん。そんな言い方しなくなつて……」

エレナはぶうつと頬を膨らませる。あざとい仕草に、一樹はうんざりさせられた。

「うん。そうかもしれないけど、君のところの社長さんはとても影響力のある人だ。だからもう少し考えて立ち回るべきだと思うよ。じゃあ、時間が押ししてるんで」

一樹はほかのスタッフに会釈をすると、高津と女性ADを促して歩き出した。

「かわいい顔して恐ろしいな」

小声で高津がささやいた。

エレナと一樹の偽スキャンダルの詳細はこうだった。四月のなかば、一樹は主演した連続ドラマの打ち上げで、明け方近くまで共演者らと飲んだ。ようやくお開きになり、店を出たところでエレナとぼつたり会つたらしい。もともと面識がないし酔っていたので、一樹はそのときのことをほとんど覚えてはいない。

しかし数日後のマイナー写真週刊誌に「福山一樹が美人モデルと深夜の密会！」という記事とともに、一樹とエレナが路上で顔を見合わせているように見える写真が掲載された。あの場にはほかの出演者やスタッフもいたのに、まるでふたりの密会現場だと言いたげな記事に憤慨した。

エレナは現在の事務所と手を切りたくて、わざと問題を起こしている……。そんな噂が業界内に

広まっている。記事が出たあと一樹は、脇が甘いとさんざん安住に怒られたのだ。

「俺も気をつけるけど、亮さんもフォロワー頼むよ」

「まかしとき。これでも敏腕マネヤからな」

スタジオに到着し、ADがドアを開けてくれた。中に入ると本番前の、緊張したざわめきに包まれる。思うことは多々あるが、一樹の頭はすっかり番組のことに切り替わっていた。

その日、最後の仕事が終わったのが、午後六時。早くゆりの顔が見たかった一樹は、時差ボケでぐるぐるする頭をこらえてワインとデザートを買い、高津とともに、渋谷のマンションに急いだ。

チャイムは鳴らさず、持っていた鍵で玄関を開ける。とたんにおいしそうな匂いが鼻腔をくすぐった。

「ただいま、ゆり。帰ったぞー」

玄関ホールからそう声をかけると、すぐにスリッパの足音が聞こえ、ゆりが現れた。

「お帰りなさいませ、一樹さん。お留守の間にお邪魔しております」

かろうじて名前で呼ぶようになったが、別府で会った頃と同じビジネスライクな口調。つい笑いそうになった一樹は、かしこまったお辞儀をしたゆりにはっとする。約一カ月ぶりに会う彼女は、ホルターネックの袖なしブラウスにタイトなオレンジのスカートをはいていた。髪はモードな感じのショートボブだ。

まるでホテルマンからやり手のフィクサーに転身したみたいだ。くびれたウエストとすんなり伸



びた腕に、思わず目を奪われたが、そこで我に返る。

「おい、その髪……。切ったのか？」

恐る恐る尋ねる。別府にいた頃のゆりは、ベッドの上でかき乱したくなるような美しく長い髪をしていた。

「ああ……。これは一樹さんの事務所のスタイリストさんからお借りした、ウィッグです」

「ウィッグ？」

「はい。おととい羽田に着くと事務所に連れていかれて、そこで一樹さんと外出する際の服やヘアメイクのアドバイザーを受けました。ダサイ恰好で写真に収まるのはまずいとかで」

ゆりは片手ですっぽりとウィッグをはずす。長い髪はうなじのところできつちりまとめられていた。

「ウィッグのほかに服とアクセサリ、メイク道具一式もお借りしています。今夜さっそく街に出るということでしたので、先に着替えておいたのです」

「なんだ、おどかさなよ」

「いや……。社長がな。お前の彼女やったらどんなタイプがええか、いろいろ設定を考えてんねん。秘書とか女社長とか弁護士のおととか。まあ、許したってや、それくらい」

高津が慌ててフォローした。

「そういうことですか。でもよく似合ってるよ」

おそらく社長の好きな映画かドラマのヒロインのコスプレだろう。一樹はゆりの頭からつま先ま

でジロジロ眺め回した。

ホテルにいたときも感じたが、全体的にすらりとしていているが、出るところはしっかりと出ている。素人にしてはプロポーシオンがいい。時差ボケのせいとか、ゆりの女らしい姿にふるいつきたくなる衝動にすら駆られる。

それに、ビジネスライクな口調と、あくまで仕事というスタンスを崩さない態度。本性を隠されれば暴きたくなるし、頑なになられば懐柔したくなる。俳優としての自分は爽やかで優しいイメージを持たれることが多いが、草食系じゃない。欲しいものは、自らつかみにいく。

手を出さないという保証はない――

ひと月ぶりに顔を見て、確信した。ゆりが欲しい、絶対に落としたい。昔のようにカズくん和無邪気に呼ばせたい。今はクールを装っているが、その仮面の奥に傷つきやすい繊細な心が隠れていることを、一樹は知っている。

まずは距離を縮め、俺のそばにいたら安心だとゆりに気づかせることから始めるか。

澄ました顔で高津と言葉を交わすゆりを見て、沸々と闘志がわいてきた。

\* \* \*

ゆりは、一樹と一緒にマンションを訪れた高津に対し一緒に夕食をと誘ったが、まだ仕事があることを理由に彼は帰っていった。今朝ドイツから帰国し、そのままずっと仕事だったという。早く